[IS]新宿のアーチャーの力を貰ったのでひと暴れする

才能ナシ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世はしがない理系学生だった主人公は神様に気に入られてＩＳの世界に転生する。

敬愛するＦＧＯの新宿のアーチャーの力を貰った彼は子供の頃に夢見た存在になるために一暴れする。

※注意書き

・この小説はＩＳとＦＧＯのクロスオーバー作品になります。

・ＦＧＯ要素は新宿のアーチャーの力を貰った主人公ぐらいになり、他は設定がぼちぼちと出るぐらいになります。

・更新頻度は不定期になることと思います。

・文の構成力は稚拙と言わざるを得ず、誤字脱字が目立つことが予想されます。

・作者のＩＳ知識は６巻か７巻ぐらいで止まっていますがこの小説にはさして影響はありません。しかし所謂にわかであることには変わりないのでご注意ください。

・タイトルとあらすじ上では新宿のアーチャーの真名は伏せていますが本編に入ったら速攻でバラしていますので、新宿をプレイしていないＦＧＯプレイヤーはご注意ください。

最後に誤字、脱字、ご指摘等ありましたらお手数ですが感想等に乗せて頂けると幸いです。

未熟者ですが完結目指して頑張っていきたいと思います。

目次

プロローグ ―― 1

第1話 ―― 4

プロローグ

迫りくる無数のミサイル。
そしてそれをまるで紙屑のように切り裂き縦横無尽に空を舞う白甲冑の騎士。
それはあまりにも非現実的だが肉眼がとらえる現実の情景でありながら、かくも美しく幻想的だ。
その美しい演武を『ＩＳのハイパーセンサー越し』に見ていると、「あぁ、私は本当にインフィニット・ストラトスの世界に転生したんだな」とレンズ越しの情景よりはるかに非現実的な事実を痛感させられる。
「正直半信半疑だったが、この後に言う白騎士事件を直接見るとあの神様とかいうやつも、特典貰って転生したことも、何より俺が死んだことも本当だったんだな」
私こと「倉持執矢（くらもちもりや）」は所謂神様転生を遂げた転生者であり、この『インフィニット・ストラトス』に発現した特異点（イレギュラー）である。
今でも鮮明に覚えている。
前世の私はしがない理系の大学生だった。何の変哲もない日常を過ごし、惰性に生き、趣味のゲームでもしながらつまらない人生を全うするモブだった。
あの日も私は当時熱狂していたＦＧＯをやりながら自宅近くの公園脇の横断歩道で信号待ちをしていた。
偶然か必然だったのか、たまたま画面から視線を外すと目の前からボールを追いかけ道路に飛び出す子供が見えた。
もう察しのことと思う。
そう、あまりにもよくある死の状況で子供が飛び出そうとしている道路にはトラックが迫っている。
本来私には子供を助けようという気概も、反射的に飛び出し子供を突き飛ばす体力もないのに、気づいた時には飛び出していた。
いやはや人間というのは時に自分でも全く理解できない行動をとるのだなと走馬灯の中で学んだ私は、諸君らが察している通り車には

ねられ無事死亡したのだ。

ただ…

私をはねた車はトラックではなく私側の車線から来た軽自動車だったがね。

何度思い出してもばかばかしい死に方をした私は、この死因が気に入られ転生することとなった次第だ。

今でも覚えているよ…私を指さして爆笑するあの忌々しいじじいを。

ちなみに私が助けようとした子供は母親が寸でのところで止めて無事らしい。その事実を知って無駄死に甚だしい私の絶望を見たあのじじいさらに爆笑しやがった。

その瞬間確信したね…

「あ、こいつ愉悦部員だ…」と。

さてそんな性根の曲がった神のような存在が私に求めるのはイレギュラーから主人公を救うオリ主的活躍か、あるいはただの道化として笑いを求めているのか（十中八九後者だとは思うが）わからないが「せいぜい自由気ままにやらせてもらうさ。その為にこの世界を選び、そして子供の頃に焦がれた願いの為に選んだ特典なのだから」

といいつつも、この白騎士事件を見るまでは本当に半信半疑だった。何せ転生したといってもまだ世にＩＳが広まっていないのだか

ら。いくら特典としてあらかじめもらっておいたＩＳと倉持の名があるとはいえ私には原作キャラクターたちと連絡を取り合う等の事実を得られるような記憶はないのだから。
「だが、確信は得た！そうここは紛れもなくインフィニットストラトスの世界であり私は私が敬愛する教授（プロフェッサー）！ジェームズ・モリアーティの力を得て生まれた転生者である！」
　私の喚起に呼応するように背中の棺桶は煙を吐き出し、トレードマークの蝶をあしらった翼はひときわ輝く。
　素晴らしい！実に素晴らしい…暇つぶしか打算か知らないが私にこんな素晴らしいチャンスをくれた神はどれだけ気に食わなくとも感謝をしよう！
　さぁ、ひと暴れするとしようじゃないか。感謝の意を込めてあのじじいの腹がよじれるぐらいの活躍ぐらいしてやろう。
「と言っても私には原作が始まるまでやることがない。彼がＩＳを動かすまであと１０年近くある。それまではＩＳの研究をしながら気長に待つとしよう。待っているよ織斑一夏君。君が舞台に上がるその日まで」
　背中にあしらった蝶の羽が輝き、ＩＳをまとった子供が空を飛び立ったことには誰も気づいていない。なにせ空にはもっとド派手な演出を行っている彼女がいるのだから。このためにつけたステルス機能により情報機器には残らない、肉眼で見ようにもそもそも誰も見ていない。すべて計算通り。
織斑（か）一夏（れ）の物語は始まってすらいないが、私の計算（ものがたり）はすでによ。
　織斑一夏君。

第1話

『先日報道した世界初の男性でＩＳを起動させた……』

テレビからは織斑一夏君のニュースの話題で持ちきりだ。当然といえばそうだろう、何せこの世界にとって絶対不変だった女尊男碑の根幹を揺るがす一大事件なのだから。

凡そ１０年前の白騎士事件を目の当たりにしてから随分と長かった。いかんせん私も男性であるが故に街を歩いていると見知らぬ女から貶されるわ財布にされそうになるわとはっきり言って散々だった。原作でもこういった描写はなくはなかったが、正直ここまで醜悪なものだとは考えなかった。というか私は一夏君と同い年、つまりまだ中学生の段階だ。高校間近とはいえ子供の部類、そんな男をパシらせたり財布にしようとする大人って大丈夫なのか…まぁ、それは置いておこう。

原作でもそうだったのか、私という異物がもたらした変化なのかは記憶にないので定かではないが現在世界各国では女性至上の思想を持った政治家やテロが数多く蔓延っている。先日先進国ではイギリスが女性至上の思想を持った政治家が政権を掌握したというのだから恐ろしい。他の国でも、勿論日本でも時間の問題だろうという意見があるのだからたちが悪い。

そんな男性にとって絶望的な状況に降ってわいた織斑一夏という希望は大いに世間を賑わせた。何せ今まで男性はＩＳを操縦できないという固定観念が覆ったのだ。そして何よりも、彼という例外が１人いたのならもしかすると他にもいるかもしれないという希望が生まれたことにより現在世界各国では男性のＩＳ適性検査でてんやわんやといった状況だ。そしてその皺寄せは私が所属する「倉持技研」にも及んでいる。

「今日も今日とて男性のＩＳ適性検査…正直言って無駄骨だとわかっているのがやる気を大きく削ぐなぁ。私が担当するのは関東地区に限るとはいえ、はっきり言ってまだまだ終わりが見えないよ」

日本でのＩＳ技術部門では我が倉持技研に並ぶ機関がないので、政

府から適性検査の応援依頼が届くのは予想していたが…
　正直こんな事をしているぐらいなら『打鉄・弐式』の開発に回したいのだが、事実を知っているのは私だけだし言うわけにもいかないので是非もない。
　今の私にできることは1日でも早く織斑一夏君が男性にとっての希望から唯一無二の象徴になるのを祈り待つことぐらいだ。いや、今は私がいるから唯一無二ではないのか。
「おはよう執矢。今日は随分とゆっくりしているね」
「おはよう父さん。正直言ってあの適性検査に嫌気がさしてね、こうして少しでも長くリラックスできる我が家にとどまることで細やかな反抗を示しているだけさ」
　私の本音に父は苦笑いを浮かべ朝食をとるために席に着く。私の父「倉持貞治（くらもちていじ）」は倉持技研のトップであり、日本政府からいろいろ無茶ぶりされてその度に身を粉にして働く苦労人だ。原作では倉持技研の人間は出ていなかったと思うが、そんな人間が大きな特徴があるはずもなくモブ顔としか表現できない人物だ。しかし、その頭脳は私でも目を見張るものがあり倉持技研のトップに恥じない人物でもある。
　そんな父の遺伝子を持つは私もまたこれといった特徴はなくモブ顔に分類されるが、顔面偏差値は中の上ぐらいだと自負している。そして少しでもアラフィフっぽさを出すために髪型はオールバックで一房だけ前に垂らすアラフィフヘアーだ。髭に関しては今後の私の男性ホルモン次第だが…父を見る限りあまり期待できなさそうだな髭生えてるとこ見たことないし。身長はアラフィフと同じ１７５㎝で高くもなく低くもないといったところだろうが、前世では身長がコンプレックスの一つだった私にとっては十分すぎるほどの躍進だ毎日牛乳飲んだ甲斐があった。
「そういう父さんこそこんな時間まで家にいるなんて珍しいね。いつもならもっと早く食事をとって研究室に向かってるころじゃないか」
「あぁ…うん。そのことなんだが執矢にも話しておかなければいけないね」

普段は「忙しい時こそ余裕のある表情を」が信条の父さんに暗い影が落ちている。どうやらただ事ではないらしい。
「実はさっきね…政府から連絡があってね。話題の世界初の男性ＩＳ操縦者である彼の専用機を作れという特命を受けたんだ」
あぁ…そうかついに来たのか。まぁ、思い出したのが１週間前だったとはいえ結局間に合わなかったなぁ。学校休んで無理やり手伝ったけど原作通り７０％の完成率で止まってしまった。
「ちょっと待ってよ父さん！今うちはＩＳ適性検査と弐式の作成で手一杯だ。とてもじゃないが専用機をもう１機並行して作る余裕なんてないよ！」
とまぁあたかも突然の依頼に驚いている体を出しているが、本心ではこの決定が覆ることはないのはわかっている。そして
「わかっている！だが政府の特命を断るわけにもいかないんだ。…それでここらかが重要な話なんだが。政府にうちの現状を話したら弐式の凍結を言い渡されたんだ。せっかく学校を休んでくれてまで手伝ってくれた執矢には本当にすまないが…」
更識簪の不遇を止めることができなくなった。原作でもそれなりに愛着があったのに、なんでこうなることを忘れていたんだろうね…止めるための行動も、手段も私には存在していたというのに。
「仕方がないよ…いくら予期せぬ事態とはいえ、父さんはできる事をやったんでしょ。でもね父さん、１つだけ言わせてもらうと謝る相手が違うでしょ」
私のことはどうでもいい、忘れていた私には責められる罪はあれど父さんを責める権利なんてないのだから。
だが彼女は違う。血のにじむ努力を経てやっと代表候補性になった彼女が蔑ろにされていいはずがないのだから。私は知っている。彼女が何を思い今まで努力してきたのかを、否定されても折れずに食らいついていた彼女の強さを、そして心の奥底で自分を救ってくれる存在が現れることを信じているはかなげな弱さを。
だからこそ私は彼女の力になりたいと思った。昔からこういう純真無垢で救われない子には惹かれるたちでもあるし、彼女の能力は私

に必要なのだから。
「謝るんなら簪さんにでしょ。こっちの都合で彼女の顔に泥を塗るんだから謝っても許してはくれないだろうけど」
「…あぁ、そうだね。謝りにいかないとね、自分の専用機を心待ちにしていた彼女に。…あぁ、憂鬱だなぁ～簪ちゃん間違いなく泣いちゃうよ！あれだけ定期的にうちに来ては弐式の作成風景を見て喜んでたのに！データ収集の時なんかしっぽが見えるぐらいはしゃいでたのに‼あんないい子なのにこんな仕打ちをしなきゃいけないなんてぇ～‼」
あぁ、今までのストレス爆発したな…最近見てなかったからそろそろかと思っていたが父さん定期的に錯乱して体ねじりながら暴れまわるからな。いつまで続くかわからないが正直今は付き合っている時間がないので私はかねてより考えていた最終手段に出ることにした。
「大丈夫だよ父さん。俺も一緒に行って謝るからさ。それに彼女を傷つけることは避けられないけど、悲哀の涙を流すことは避けられると思うよ」
「!?本当かい、本当にあの子を悲しませずに済むのかい？」
「任せてくれよ父さん。何せ私には腹案があるのだから」

私と父さんはあれからすぐ更識家にアポを取り、現在絶賛謝罪中であります。
予想通り彼女は激怒している。彼女とはあまり面識がないため記憶上のデータから算出するほかなかったから計算が甘かったようだ。二割増しでヒステリックに喚いている。まぁ、当然といえば当然だろう。激怒するのは当然だし彼女は原作よりもわずかとはいえ若いのだから。
「私の機体を先に完成させてからではダメなんですか!?」
「いや…政府から彼の機体を最優先で完成させるようにと言われてしまいまして…それに、弐式の凍結は政府からの命令でしてうちではとても」

「なんで⁉私のほうがずっと早く約束されてたのに！私のほうがずっと頑張ってきたのに！私が…私がやっと認められたと思ったのに…何で、何でなんでナンデ皆それを否定するの⁉何で突然出てきた男が優先されて！それまでずっと頑張ってきた私が我慢しなきゃならないの！こんなの絶対おかしいじゃない‼」

彼女の剣幕と怒涛の攻めに父さんはたじたじで正直頼りにならないな。これも計算より情けなさの値が増えてるなぁ。やはり教授の力を得ても私は暗算が苦手らしい。所詮は元一般人なのだと再認識させられる。

と、くだらないことを考えてるといい加減彼女が泣きだしそうだ。父さんも父さんなりの矜持があるだろうから様子を見ていたが仕方がない。一肌脱ぐとしよう。

「更識簪さん、あなたの怒りは最もだ。私は貴女の今までは知らないので同情することしかできないが、貴女の力になれることが1つだけあるんだ。どうか聞いてほしい」

「…貴方は誰ですか？同情なんて最初から求めてないし、私の力になれる？見たところ私と同年代くらいなあなたに何ができると？」

どうやら興味を持たせることには成功したようだ。しかし、今のやり取りで彼女の中の私と男性に対する信用が地に落ちているのか目にハイライトがともっていない。ぶっちゃけるとめっちゃ怖い。これ失敗したら間違いなく彼女は人間不信コース待ったなしで男性嫌いになるだろうな。もしそうなったら百合的展開になる可能性もある、か…ふむ、悪くはないがさすがにそれを見ようとすると色々とまずいものがあるのでやらないし彼女を不幸から救うことにはならない。何より彼女を悲しませないと父さんと約束している。

簪さん、どうか落ち着いて私の話を聞いておくれ。

「これは失礼。私は倉持技研リーダー貞治の息子で、臨時研究員として務めさせていただいております倉持執矢というものです。挨拶が遅れて大変申し訳ない。あなたの気を引くために同情などという安い言葉を使ったことを許してほしい。しかし、貴女の力になれるというのは本当です。少なくとも貴女にとって、最高とは言えなくても妥

協しうる提案です。せめて話だけでも聞いて頂きたい」
「…いいですよ。貴方の提案には正直期待していませんが、聞く価値がないと切り捨てるには惜しい気がします。でも、もしその提案が私の満足できるものでなかった場合、私はもう二度と貴方たちの手を借りることはない。とだけ言っておきます」
　よし、最初のステージに立つことに成功した。ここで躓いていたら計算のくそもなかった。最大の難関はクリアした。失敗したら原作通りの行動をとるというお墨付きをもらってしまったが、もとよりい失敗するつもりなどない。ここまできたのなら方程式さえ間違わなければ成功は確定しているのだから。
「寛大な処置に感謝します。さて、私の提案というのは『打鉄・弐式』のプロジェクトを完全には凍結しないというものです。具体的には、現在プロジェクトに携わっている職員の殆どを新規開発班に回し打鉄開発には少数精鋭で当たる」
「ちょ！ちょっと待ってくれ執矢！打鉄開発のために精鋭を残す余力なんてうちにない。そのことは朝、執矢自信が言っていたじゃないか」
「邪魔しないでください父さん。研究者を残すことができないことは百も承知。しかし、父さんは忘れていますよ。倉持技研にはそれだけの人材はいない、しかし倉持技研に『正式に』所属していない研究者の中にはそれを可能にする人材がいる」
「お前…まさか…」
　ここまで言えばさすがに父さんには私の考えが分かったようだが、こちらの事情を深く知らない簪さんはまだ全貌がつかめていないようだ。
「よそから研究員を補充するということですか？笑わせないでください。日本には倉持技研に並ぶＩＳ研究者を抱えている機関など存在しませんよ。そんなどこの馬の骨ともわからない研究者が作った機体なんてとても信用できません。どんな初歩的なエラーが起きるかわかったものじゃない。よもや、海外から引き抜いてくるなんて馬鹿げたことを言うんじゃありませんよね？」

私の考えとはあまりにも見当はずれな回答を提示させられて思わず吹き出しそうになる。国内にうち並みの研究者がいないことぐらい誰でも知ってるし、海外から引き抜きなんて行えば下手をしなくとも国際問題になる。一応ヒントは提示しておいたのだがどうやら見かけは冷静でも内心には先ほどの怒りが沸々と煮えたぎっているのだろう。もし彼女が真に冷静であったならば間違いなく気付けたはずだ。

「まさか。貴女の示した解はどれも実現不可能だ。そんなことはここにいる全員が理解している。私が言う精鋭というのはもっと身近にいてここにいる全員が知っている者のことですよ」

「回りくどいですね！誰なんですか⁉その研究者は」

うーん、ここまで行っても理解できないか。私は一度も

「簪さん、私は確かに自己紹介の時に自分を『臨時研究員』と申したはずですが」

自分を倉持技研の研究員だと言っていないんだがなぁ。

「は…？まさか、貴女が打鉄弐式の開発に携わると…？」

「Ｔｈａｔ，ｓ　ｒｉｇｈｔ‼そう、少数精鋭という言うのはすなわち私のことであります。僭越ながら私はＩＳに関する知識は「ふざけないでよ‼」…」

私の言葉を遮り簪さんはその怒りをあらわにした。さきほど父さんに向かっていた怒りより数段上の憤怒でもって私をにらんでくる。

「突然謝りに来たかと思えば、やれ私のＩＳ開発を凍結する、やれ私のＩＳ開発をまだ大人にすらなっていない男１人で行う…？貴方達もしかして私のことを馬鹿にしてらっしゃるんですか⁉いい加減にしてくださいよ！たった１人でＩＳを開発するなんてあの人でもない限りできるわけがないじゃないですか‼まして男の貴女が‼ＩＳに乗れない不適合者がＩＳを作成するなんてできるわけないでしょう！」

爆発した怒りは矛先を言葉に変え私たちに襲い来る。本日最大の怒りと憎悪を吐き出した彼女を見た父さんはたじろぎ沈鬱な表情を見せる。おそらく失敗したと思っているのだろうが、大丈夫だよ父さ

ん。これも全部計算通りだから。
　そもそも今の彼女がぽっと出の男を信用できるはずがない。もし開発に携わるのが父さんだと言ったらもう少し落ち着いてはいただろう。しかし、父さんではダメなのだ。彼女の期待を裏切らずに機体を完成させるには俺しかいない。
　現状彼女は俺のことを一切信用していない。それは実績がないということも１つの原因だろうが、最大の要因は私が男だということだ。
　さっきも言ったが彼女の中の男の信頼は地に落ちている。そんな時に自分の命を預ける機体を、ＩＳのことを深く理解していないと思しき男１人に任せられるはずがない。
　だが、それは裏を返せばＩＳの事を深く理解している事実を証明できれば交渉の余地があるという言ことだ。そして私にはそれを可能にするカードがある。
「貴女の意見は最もだ、否定しようのない正当なものだろう。しかし、この場に限ってはそうではない。何故なら私は国内に限らず全世界中のどの男性研究者よりＩＳに関する知識と理解がある」
「ハッ！貴方みたいな若輩研究者が随分大きく出ましたね。そこまで言うのなら当然それを証明出来るのですね！口先だけでないのなら私も考えなくもありませんがね！出来るのなら‼」
「勿論ですとも」
　そういって私は自信のネクタイにつけていた蝶型のネクタイピンをとり彼女の前に差し出した。私の行動に彼女は訝しみつつも差し出されたネクタイピンを見つめていると、彼女は驚愕した。
「これって…まさか⁉」
「Ｔｈａｔ，ｓ　ｒｉｇｈｔ」
　―展開―
　私がそう念じればそれはすぐに答えてくれる。ピンは青く輝き、発せられる燐光はさながら蝶の群れが羽ばたくかのような幻想を生み出しそれは顕現した。
「これが私が男性の中で最もＩＳを理解しているという他ならぬ証

明。私が私の力のみで一から作成した私の専用機第三世代型ＩＳ『プロフェッサー』だ」
「Ｉ…Ｓを…起動した…？」
「も…執矢…おまえそれ、いったい…いつから」
「ん？うちにあるＩＳコアを１つこっそりくすねてぼちぼちと。時期的には第一世代が引退した時だね。その時に情報を改竄して…」
「い、いやそっちじゃない！いや確かにそれも重要だが今はいい‼父さんが聞きたいのはな！お前いつからＩＳを動かせたんだ」
「父さんがＩＳ研究を始めて最初に俺を研究室に入れてくれた時」
　と、あらかじめ用意しておいた言い訳を述べて父さんの追及をかわす。本当は生まれたときからだがそんなこと言っても信じてもらえないだろうし、言うのもばかばかしい。赤ん坊のころにＩＳを持っていたのはあの神の力。正確には未来の私が作ったＩＳをコアごと過去に飛ばしてもらったからだ。だからプロフェッサーを作ったのが私というのは本当だし、生まれたときから動かせたというのも本当だ。ＩＳを過去に飛ばした理由は…なんだったかな？記憶にないや。
　まぁ、そんなことはどうでもいい。今一番重要なのは
「どうだろう簪さん？これでもまだ私の技術を信用してはもらえないだろうか？」
「ほんとうに…あなた、ＩＳを」
「そうだとも。今まで公表しなかったのは現在の状況からわかる通り非常に世間を混乱に陥れる。それに貴重なサンプルとしての扱いや監禁生活なんて御免被るから誰にも話さなかった…今は少しばかり後悔しているがね。簪さん改めて謝罪する。私がもっと早くこのことを公表していれば君は現在の怒りを抱くことはなかっただろう」
　だがそれは、簪さんとは別に同じ思いをしていたかもしれない人がいることを意味している。
「私がもっと早く公表していれば、君は今までの努力を否定されることはなかっただろう」
　しかし、私はそんなＩＦの可能性に巻き込まれる見知らぬ存在よりも更識簪というかつて確かに感情移入し、気に入った存在を優先す

る。
「完璧すぎる姉と比べられ、常に付きまとうその幻霊を振り切ろうと身を顧みない努力をした貴女を否定していいはずがないのだから」
「…え？」
「更識簪さん。私は貴女の姉にはあったことがないのでどれほどの存在なのかは知らない。だが、私が知る簪という少女は真面目で努力家で優秀な少女だ」
　彼女が常に姉と比べられていたことに苦痛を感じたのならば、せめて私だけは彼女という存在のみで彼女を肯定しよう。しかし私は…
「貴女には貴女しかできないことがある。それを証明するための手助けを私はしてあげられる。いつまでも姉の幻霊が付きまとうのならば、貴女が優れている分野で姉を打ち負かし『私は更識簪だ！』と宣言してやればいい。その為に手助けを私はしてあげられる」
「ほ…本当に、そんなことができるの？私のＩＳを作れるの？あの人の呪いを…貴方は振り払ってくれるの？」
「あぁ、勿論だとも。私の手にかかればたとえ世界征服だろうとその１つや２つ容易に達成してやるさ。しかし、君には申し訳ないがきっと…私は君のヒーローにはなれないだろう」
「⁉な…で、それを」
「君の普段の言動などから計算してね…大抵のことはしてやれるが私はヒーローなどという柄ではないし、もとよりそんなものに焦がれるたちでもないのだ。でも」
　君の嘆きをぶちまける洞ぐらいにはなれる。きっとこの先君の心を本当の意味で救う主人公が現れる。間違いなくそれは私ではない。だがその主人公が現れるまでは君の嘆きを聞き、君を支え、背中を押す良き存在になろう。
　だから
「私を信じてほしい。私を信じて、君の命、君の誇り、君の未来を私に預けてくれ。今すぐでなくても構わない。よく考えてくれて構わない。だが、今はひとまず泣きなさい」
　私はＩＳを解除し今にも崩れ落ちそうなほど動揺した簪をそっと

抱きしめ囁いた。その瞬間、彼女の中で何かが切れたのか私を抱きしめ返した泣き始めた。私は彼女を優しく、だがぬくもりが伝わるよう力を入れて彼女を抱きしめ、時に彼女の背中を、時に彼女の頭を優しくなでる。この時私には間違いなく彼女の心に巣食う真っ黒な闇を貫いたと確信した。

１０年以上貯め込んだ嘆きをすべて吐き出すまで、彼女か満足するまで私は彼女の洞になる。

…結局泣かせてしまったが、まぁこれは悲哀の涙じゃないから勘弁してくれよ父さん。

結局簪はあの後泣き疲れて眠ってしまった。後日、私の提案を承諾するという旨を倉持技研に来た彼女から直接頂いた。その時名前で呼ぶ許可ももらった。自分で仕組んでおいてなんだが、前世を通して女性を名前で呼ぶなど幼稚園ぐらいでしか経験がない私は柄にもなく少し緊張してしまった。今ではなれたものだがな。

さて、これで用意すべき条件はあと1つ。それさえ整ってしまえば後はモリアーティ教授の驚異的な計算能力で解を得られるだろう。その解に従って行動していれば私の願いは、子供の頃に見た夢はかなうのだから…

所で…最後の条件…私の夢…

それって…何だったかな？

記憶にないや…

私はいつも姉さんと比べられていた。それはどこの家庭でもまま見られることなのかもしれなけど、私の場合それは顕著だった。
優秀すぎる姉さんと、平凡な妹。自然と周囲からは姉を絡めた重圧がかけられた。
毎日毎日、私が何かをするたびに「お姉さんは」、「貴女の姉は」って言われ続けた私は自然と姉さんのことが嫌いになった。
八つ当たりだってことは分かってたし、逆に姉さんは私に歩みよろうとしてくれていたのもわかってる。
でも私の中に生まれたドス黒い程感情は姉さんを拒絶し、いつしかそれは姉さん以外にも向けられることが出てくるようになった。
そんな自分が嫌で私は努力した。努力して、努力して、努力して。
いつしか姉さんと比べられることがなくなる日を信じて。いつしか姉の隣に立てる日が来ると信じて。
けど、私がどれだけ頑張っても…あの人は悠然とそれを越えていく。
あの人が1人でＩＳを作ってロシアの代表候補性になったのに、私は日本の代表候補性が精一杯。でも、実力は違っても代表候補性という土俵に立つことはできた。自分で作ることはできないけれど、専用機を貰って頑張ればあの人と戦うことができる。勝つことはできなくてもあの人に一矢でも報いることができれば私の状況が少しは変わるかもしれないと信じて。
なのに私は自分の国に裏切られた。
世界初の男性ＩＳ操縦者の為の専用機を作るため、私の専用機開発は凍結されると技研のトップが直接謝りに来た。
意味が分からなかった。何で確かな実績を持った私より、どこの誰とも知らない男の子に遠慮しなければならないのかわからなかった。
正直そのあとは自分でも何を言っているのかわからないぐらいヒステリックになった気がする。
でも、絶望に沈む私を救い上げてくれる人がそこにいた。
技研トップの息子の倉持執矢

彼は初めて私を認めてくれた人。初めて私だけを見つめてくれた人。

最初は私も信用できなかったけど、彼は私の中に眠るドス黒い悪意を的確に指摘し、刺激し、結果としてそのすべてを吐き出させてくれた。私の全てを受け止めてくれた。

貴方は自分のことをヒーローになれない人間だといっていたけれど、あの時の貴方は間違いなく私にとってのヒーローだった。

貴方はやがて私の心を救うヒーローが現れるといっていたけれど私の心はすでにあなたに救われている。

だってこんなにもアナタノタメニツクシタイと願っているのだから。

私の心は間違いなく救われている、救われているに違いない。

もし、貴方の言う通り本当のヒーローが現れたとしてもきっと私は貴女に尽くすことを選ぶだろう。

だってもう私の心には救われなければならない心などないのだから…